

^ 13
2898
13



門へ13
號 2898
卷 13

参年戌七月辰江下着

接五冊之内

近世新話 雲晴間雙玉傳第三輯卷之三

播陽 宮田南北編次

昭和十九年七月四日

第廿五回

行龍大挙して天神山の城と取

去程小大亭が妻ありける積霄草へ大勢の女中と集へ酒宴
の奥最細ある所へ猛可ふ聴ゆる閑の声。御側付ある深溝頼大夫
は立あがり眉小離寄心得ぬ城外閑の声起り誰も行
見届来ると呼ぶる内もあはれごと人声次第小間近あり門
と守り頭人何某息と切奥へ駈付。今城外へ百姓共と見え
其勢あしうそ一万許人不意に推寄いへ量小一揆の亞流あらん早や

長壽門

四命

穴

又三傳二編

防禦の御准備あれと狼狽あがり呼とれは頼大夫の大驚き。積宵草ふ此よと申上人と思へども積宵草の大酔して前後も知らず予これ頼大夫のせんごどあく。奥座敷へ早入させ自ら大
 手の門近く走り出門の上小駈上つて是と見らる。賊兵早くも大手
 門間近くも責寄來つ。早一同小責鬼も頼大夫の大恐をどが儘
 門と走り下りいづれせんとも身と操。此時城止る者二百五六十名あ
 りといふも一名も防人といふものあく。皆顔色土のどろろあり狼狽
 まるる。登り寄手の大勢陣内も大手の門と打破り早ひしりと
 是のり。竹鐘をもちて刺伏敵伏。片端より操立ま。深溝頼大夫大恐
 奥座敷ふ走り入。積宵草ふ此よと。恠々と告られは積宵草の

此時あり。酒の酔醒るるこれ始と驚き仰天。恐まて
 も立夏あこを守。頼大夫のやうくと轎ふたすけのせ。搦手より逃
 出んと足と早め搦手の門まで出て来り。豈えりや
 此所へも數千の寄手向うり。頼大夫の仰天。轎と打棄お。又
 大手へと逃去り。登時一名賊將の列とをあまて。徐々と轎近
 立寄つて。丁と蹴放と轎の戸より早く中よりと。轉ひ
 出らる。積宵草の細首掴んで宙引さ。首打落して。弃
 らる。是即別人あらず。較倉紫雲二郎行竜あり。此時寄手の百姓
 共我れいと城中へ籠入大勢雲のどろ。早數千人ふ及びられは頼
 大夫のあうり。大手の方へ出んとす。此手ふ進り。賊

の大將頭太夫と引摺み只一刀打落す。首へ遙ふ頭太夫が辨へ
えこと倒さる。是即別人あらず。大手の大將異あり。恠り
あらず城兵等一人も敵對者あらず。大地の上へ跪き皆降参す
とられば行龍門の深くもよろこび。降参る者と按撫し
一城全く手ふ入れれば勝鬨と三回あげて万歳とこそ呼ば
る。較倉行竜翼門の手下と正堂召聚へ計と議しる。豫
ての謀定しる。當城既手ふ入れども是より三木へ聽へば
彼所の討兵来るべし。そを待受て防ぐんよ。此方より討出て途
中ふ敵と追まらる。直ふ三木へ責入べし。然らばも百姓ども三木
殿の恩と思ふ。俺們が策ふ隨ふが由りこそ大恩及ぶべし。只

百姓と懐人夏黄金ふまらる。東西のあり。這城少く大學が金
集し朱錢の固原倉裏ふ多くあまらば。あまると民も賑して心
と懐らふあらうと。一個が云は俺衆一同に這義真ふ妙論ありゆ
一塊兒ふ云々れば行竜是ふ從ひつ。不題衆の百姓と正堂の前集
行竜目録側立出づ床机ふかやと言詰正しく云々るやう。我這回你
達們と這城墨と攻抜し私の栄利ふあらず。蒲上の無双の強賊
も。君と欺き己が栄利と極め久しく曹操司馬懿が奸計と
たくらへし。夏と最心憎く思ひぬ。叔丁を不意ふ兵と起して天
神山の城累と責取らる。徐們が為と思ふ。猶這城ふ財
積し。重器衣類ハ云も。金銀手てわ大學が別所殿の目と

又三傳三編卷之三

の守り。非道不得。東西あれば汝達ふあつらふ。其時行龍又云やう。此儘村へ引取らるるも。浦上の玄智の者あまは。と助け置べき忽地ふ禽らる禁獄せしむ。夏必定あり。今其危成振奪て某し們ふ従ひつ。長く味方とあるならん。富貴は日頃ふ十倍べし。這爰ふ某し思ふ存あり。其由へ今よりして直地ふ三木へ發向し。浦上が日頃の玄悪と別所殿ふ告訢さす。然らば今回の罪科とのがれよらるるびの眉と聞くべし。志つたあきども三木殿より討手の勢向來るべし。その敵對も敵對さるるも。機ふ臨で某しより。進退の指揮

とす。是は汝達と思ふがゆへ。ゆへに思ふべし。最もスノグふのぐらねば皆々是と打聞て君は実仁君あり。登時翼やや。三木殿の討手來らば一隊ふあつて防がね便か。吾濟の兵の半と分ち。宇羅女と先鋒として。大門村より進むべし。吾夫の鯨紅戎先鋒ふす。新町村より發向し。三木の討手強や。味方の危急不及びあば兩軍相應して救ふべし。其余の機ふ。ぞと変ふ應じ。全き捷と得べき。いざ打立んと云われ。行竜見ふ従つ。一揆の兵と二千ふかけ。一隊の翼と大将。一隊へ自ら大将とあり。左右ふ別も。立拵たり。説且両頭去程ふ

較倉紫宅二即行竜へ巽女と兵と分け。よの
新街村より進
む。一路の勢ひ破竹のごとく。従ふ者へ味方
ふかへ従はざる者
へ片端より。打潰してすくれば。誰か一個も
従はざる者
の兵益々多勢ふありて。勢ひ控ぐびやも見
へざる者。その内
ふ新街村に於て。豫て浦上が内意と受け。悪
事ふよせし者
あまふ。行竜下知く。片端より。打潰し。其財
宝と掠奪
して。屬下兒の者ふらるる。かまはざる。わ
ざらぬ。一揆
の。在る所。と威く。乱妨狼籍數知らぬ。ま
ごとく
其兵二万許人。しるし。しるし。しるし。しる
し。しるし。しるし。しるし。しるし。しるし。し
るし。しるし。しるし。しるし。しるし。しるし。
並沖之進名古小太郎の兩人の登日己の刻
すぐるころ

川筋まで出ると。ふ近隣の百姓侶追々出
來り。賊もあつて大軍
も。輕々しく。當りごとかり。西公僅二個
も。向をせり。時危し。
且く御引取あるごとく。と勸ふれば。小太
郎の血氣の若花者此も屈
せず。賊の兵大軍ありて。何条恐る。夏や
あつて。人打向て追散
え。と暴強制して。仲之進小太郎も。土寇
の兵們へ元來して鳥合
の集り勢あつても。一万許人と聽へる。味
方の兵の來ると。待隊
と立。駈向ひ一戦ふ追散と。人暴強て。夏
と誤ちあら。後悔其處ふ立
が。ころ人恐る。ふ似れども。霎時這里
ふ待べし。と制する。辞ふ小太郎
も。拳と握。控てあり。恠る。つ木より。して
軍勢追々ふ。駈つ。所
つ。半時。ころ。する。ころ。ふ。一千許騎
とあり。れば。援並仲之進下知

して云やう察するふ土寇の兵ハ隊とよと出来らん然も大
 軍あり味方の兵ハ駈引と調諫しる者あまも僅小是一千
 兵も勢ひ奔一々隊と固て向ふべしとて名古の小太郎と先
 陣より自後陣の兵と迂へ北に向き進むやう西川の東岸より端
 あく賊の兵と出合し登時小太郎忠孝ハ馬と陣頭小駈出し土寇
 の陣と叱と見るふ登勢隊一万許人皆箠笠より身と固め竹鎗と
 横へ利鎌と持て陣列より整と紙幟と形々小押立一齊とと
 と唱敵とぞ拳とるる名古小太郎忠孝ハ馬と踊らせ大音り
 呼とるる云やう土寇の大將ハ何所ハ飲ある三木の城主別所藩磨
 守長則の御衣ふおひる名古小太郎忠孝ヤ関すべき一条あく近と

出よや罵りなれば較倉紫宅二郎行竜名古の小太郎といふ声と
 関より忽地馬と陣頭小乗出し馬上あぐるふ禮とのへ寛々と笑
 てややうやよ珍や小太郎大人何日とや振加西の宮の駄おひ
 て初く面會ししたる西播の標客池垣貢やういあり絶て久し
 き拜顔ありと呼たる声小太郎ハ駭然とて是と見るふ船ふ
 べきもあるぬ池垣あまも小太郎ハ愕きあぐる阿々と笑ふや
 やうこの珍や貢ある欵汝つあまもバ愚民と迷し猥り小張角
 が行とあり國中と騒動せるや登意とこれと呼ちれば行竜大
 音ふややう天神山の城主浦上大學百姓と残害し賤と怒り
 栄利とさうり祭と紂が悪と肆やして国の費と顧む汝が主の

別所殿も大學が惡と悟る夏あつても守却く伴ふ民と苦虚まで誰う
 是と惡まざらん我湯の築と放ち周の紂と伐多ひ例ふあつひ
 無道の別所と討戮と汝も早く家あ入り刃の首ふのぞむ待
 べ早去まざつと罵らるる小太郎大奮激し大胆あり賊匹夫
 其舌の根と切さげらまんと馬と飛して突て鬼まば行竜が左右
 より鯨江濡九郎吳古狗高内拔連く切く出ると小太郎ハハハ
 恐ま手兩名と相手不闘ふ更十余合忽地吳古狗と馬より下へ
 啗一刀ふ斬落せば濡九郎大忠色馬と返して逃去べ小太郎大ハ
 いまゝ味方の兵と一回招くば榎並仲之進諸軍と下知して
 一斉子責鬼まば賊軍も一斉不總先とさうえて進み来る土寇の

兵の大軍あまごども三木の兵ふ斬立られ色めさ立くすく得む行
 龍大憤り馬の上あつ立く口ふ咒文ととあられば一天猛ふ闇ら
 あり石と巻砂と飛して見る闇夜のぞくありぬ行竜大ハ味
 方と激しすめくと下知すれば一万許人の一揆も大浪の寄る
 ぞく取てくして戦あつる榎並仲之進名古小太郎ハ色め味方
 と激しく一足も引くと揉合らるる又果べらも見へざらん
 再却話異女へ行竜と二手小分を守雄女と先鋒すめ是も一
 揆の百姓們と一万許名引連く首言瀧野まで出ると這里ハ
 ハ母藤浪の墓墳あり異ハ心急ぐ中ハ母の墓墳へ詣てつ最ハ
 叮嚀ハ花と手向水と海香と結び追善寺開かるとさうらん

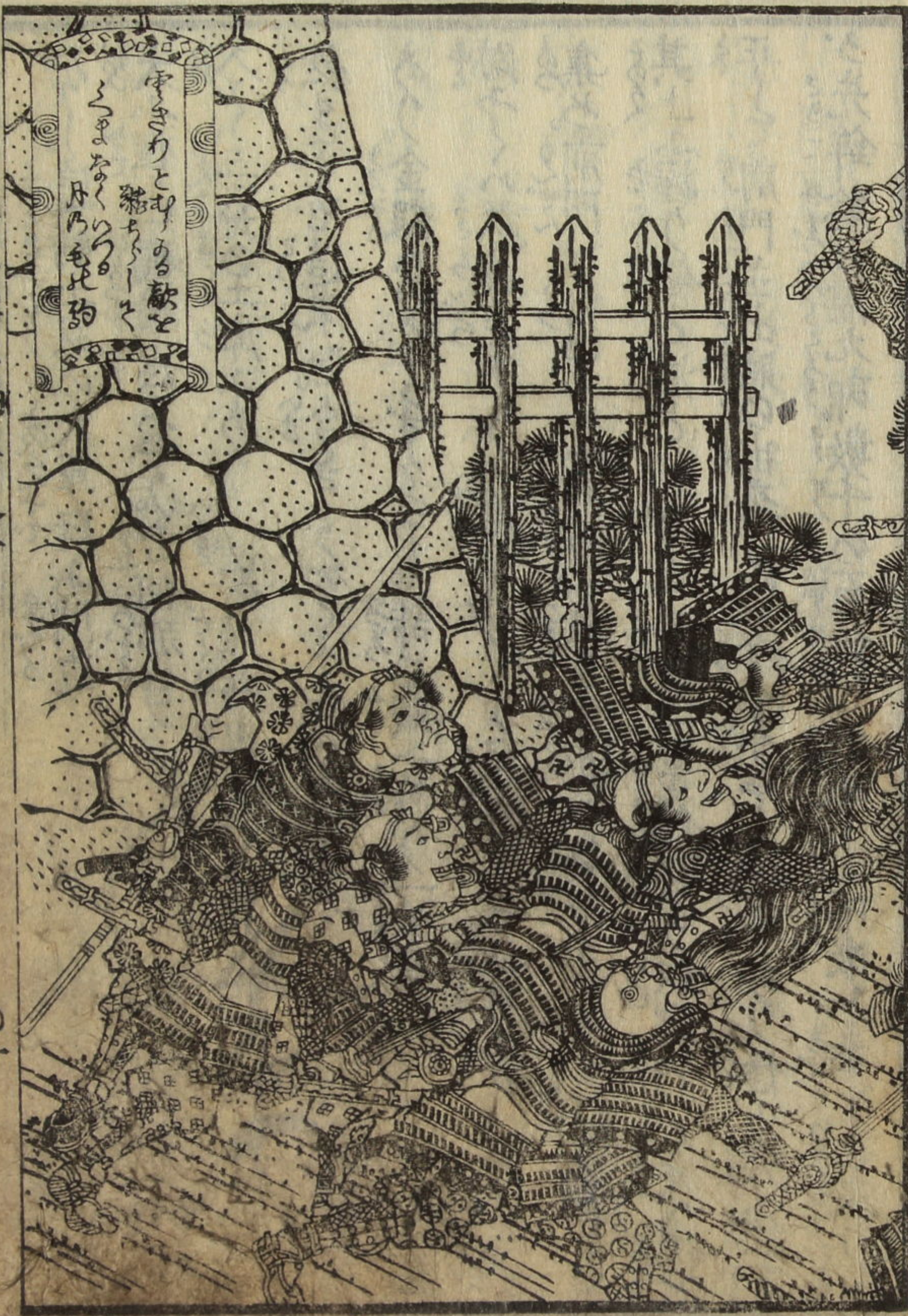
恁て這里も打過つ古卿も飾る錦の袖も余る姿の花も実も梅香薫
 出扮と這里や那里の里人們見毎々ふあまこころへ出首古主
 の譲々あへん噫見まある出扮やううぐ恁まで小乙女の英雄も
 とあられやと驚嘆せざるはあうらる異父の太平二が果敢
 あくやうてそが家さ入跡かともあく草生茂りて昔ふか
 荒野とあうく見く思をぞ浮む世の涙も沈む獨りも親か
 太平二主の雲時育養の恩と受うり其心へやぬと恁
 まで絶へ家軒の世へあまをさとのあうかしと嘆惜するも理
 りたうらき恁る心引えく異父心のあらびと激し米穀と時し
 家々閉るも凝機せよ一揆もふ下知く乱れ入る倉稟

小まれば隈あく壞て米穀兒金銀て京取打碎せ乱妨難果
 川西の村傳ひと前々ふ西の方へ暴路を開て通りく這時
 も川東大門村の方ふ當つて唱噉天小夷き戦塵雲ふのり野
 しくあつてまふ異父の恁と見るようも即時小早馬とめく
 竹候せむらふ今と戦ひ最中あく一揆の勢と三木勢と追え
 くの戦とつと竹候の者恁と見るよう馳えつて恁とば
 と異父告うられ異父の猛可ふ宇難と召んぐ四千計の土兵と
 子へ川と東へ打りく三木勢の後よりとつと喚く討て蒐れ
 ば思ひかけあま別所方宇難が兵は後と討て乱れ馳で敗走と仲
 之進大ぶら馬ふつて立下知されども敵へ目ふあまる大軍あれ

大將の下知も知らず南とさして逃るやど一覆並も今ハせん
も之あく。味方の勢引立らま俱不敗走とらうらう。小太郎ハ
ちりり入る。只一騎馬と飛し群る土寇の真中へ真直闇み突て入り
當るものと雄伏突伏必死成て戦ひし。味方の大勢敗走して土寇
の大軍のささくふりささくかきふ蒐つく推來まは小大郎ハ今朝よりハの戦ひ
ふ身体大ふ芳まふられは這里までや。陣没せんより。引くこ
より。計儀とあすふ如しと思ひふられハ口惜あら馬とひら
りこ引く。群る中と駈通るふ其勢鬼神のごとく。一万許人の敵方
かきと。其威ふ恐ま。一人も追者ささくふあつらる。

第廿六回 土寇悪富作忽滅す

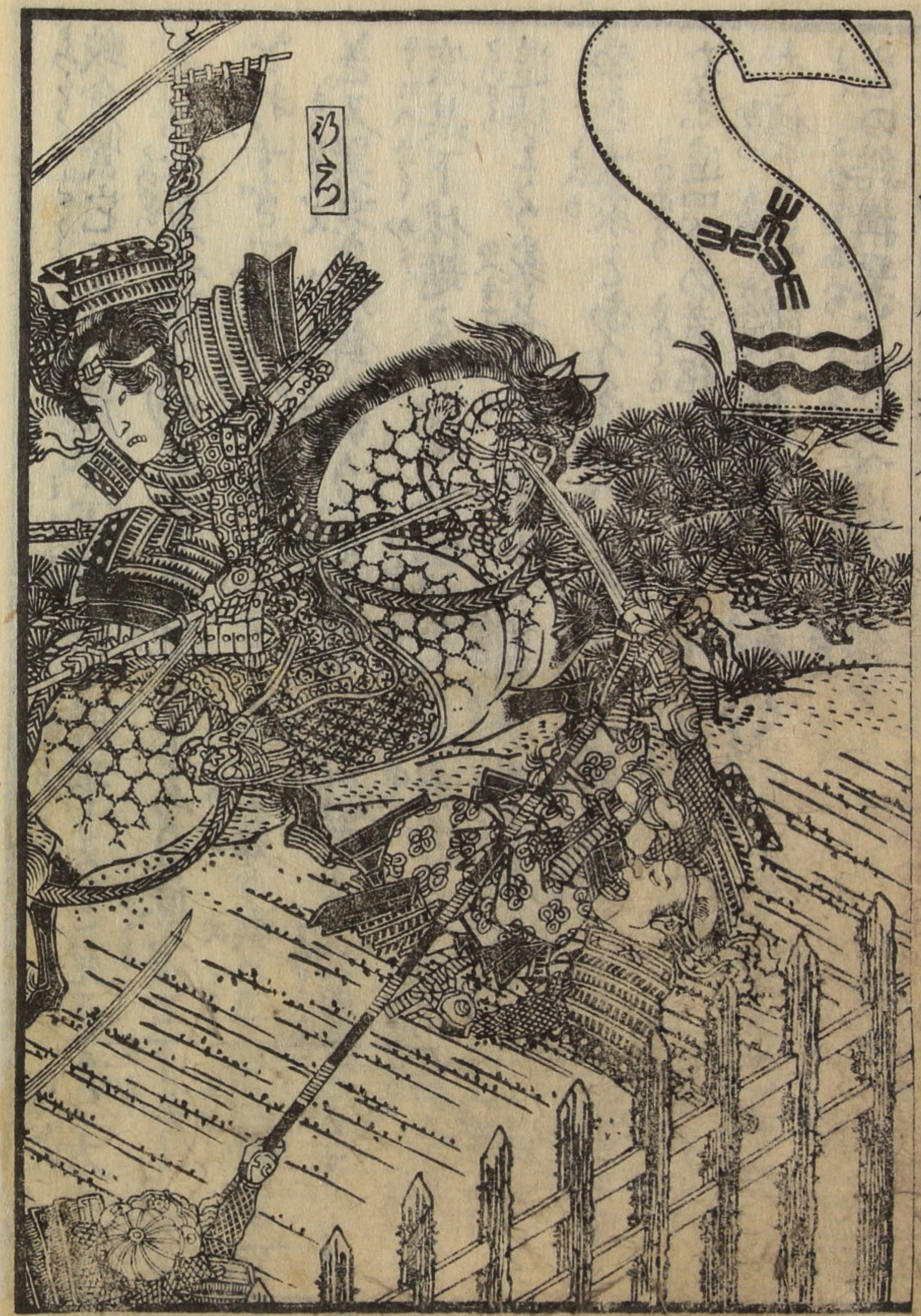
較倉紫宅二郎行龍ハ三木勢既引取ると見るより大ふのさ
し。此勢ふすりやくと。采配うちらり味方と下知し。村々
と打すごと。豊地村まき來らう。宇薙が兵ハ再び川西へ引退
き又異女が先鋒ふ加り。是も村々と乱妨して南の方へとす。さう
案其下休題こふま。娼婦七草が兄あつらる。浮雲屋の富作ハ
這頃こが家益々盛んやして。田園野買求り大富近村み並ぶもの
あり。大家とありれば。その意大ハ驕侈豊地村の百姓ハ云ふおよ
むす。這甲下の者侶ハ奴婢のごとく見下して富で人と恤む度とせ
と。後て己と謙ま。さう妻と母頼と喚做らう。及二名の妻あり。住
宅の結構聖と建並べ過分の侈と做といへども。さう小下と恤む



中よりとむる敵を
殺すべし
月乃も此の
時

又五傳三巻六十一

四



乃乃

又五傳三巻六十一

なり。這時土寇の大軍既ふ間近く来りしと聞ゆも心のうち
 大に惶を獨債思ふや。吾何那日蒲上殿より憑きて。朱穀殿實
 入る。三ヶ地の土庫ふあり。一揆の賊兵出来らば涼棄せしむべし
 然まども這米と今さうかくすふそのようあり。這首ふ二の謀設
 あり。金銀のさうずら。詐て賊兵降り。一首言虎口と脱まあが
 跡あり及意定あらん恁ありしと思案し。猛可ふ奴婢們と喚
 集ら前門と打ひらせ。門外へ廣き床机と幾つともあかき並置さ
 其上握り飯と酒とを多く居並べ富作自ら奴婢們と従へ禮と
 正して前門立出賊の出来ると今や今やと待てあり。恁る所へ
 先鋒鮫江濡九郎數千の百姓と引率し。唱噉と擧て出来り富

作が門前。酒と飯とを並べしと見ると鮫江下知と傳へ百姓ら
 小喰しむる。瞬内小喰盡すと登時にも富作の地小跪てや
 某の富村の府民。浮雲屋富作とや者ありしむ。這回恁大
 兵と起し。頭領大王へ早速降参し。すべしと一家の
 男女們。尊公們。高威ふ。恁も那這と亡命して。家丹と守るべき
 者無ゆ。遠く迎へた。まら。万死と怒り。まらるべきやと最
 讓て演ら。濡九郎は是と閉さて。這奴ら。浮雲屋富作
 ある。次那が妹七草へ。蚊倉頭領の手ふ掛りて死し。那妹の内也
 思へんも計りか。首言這よ。と行童主。小造。よ。恁と思
 ひ。それ。即時。人。と。と。後陣。不知。され。紫。二。即。行。童。

八尋の小儀羅と引卒て。這所へ出く來つ富作とみさくに向て云々いひまはり和主わぬし早
 くも某これこと見忘みわすまてくる軟品にやうひん曾古そこが小厨こぢあり一紫いそは七三郎しちざうある
 と見覚みしるある軟にやうと笑つ、詰つまへ富作とみさく驚おどききく首くびと擡おさ行ゆ竜りゆうと見て
 大小おほい愕おどき汝なんぢへ出い出い曾古そこ太平たいへい二ふたが家いへふはくへく。小厨こぢやあり
 しくと。いんんとせしぐ愕おどき恐おそまき。さうた一言ひとことも出いまてとあこ
 ぶ。半時はんじたうりの首くびとさめて震ふるま。く。く。く。控ひかへ居いると百姓ひやくしやうども
 口々くちくちやや。這こ浮雲うきぐも屋や富作とみさくの近頃ちかごろよりの覇成はあひや。平日へいじつふ人と
 芥あひのどく。輕かろく。思おもふ癖くせ者ものあり。其その人ひとと怖おそまきと知らず。浦上うらじ殿どの
 ようの意いと受うて采さいと多おほく買か入いらる。近村ちかむら一ひとの大悪人おほいあくにんあり。恠あ奴やつ
 とくすけあ。又またいりある悪謀あくぼうと。做あまも回測わいそく。早打はやうち入いんと聞き

行龍ぎやうりゆう急いそふ押止おしどめ。汝なんぢ達たち騒さわぐ夏なつやとある。我目われめ思おもふ言ことあり。控ひかへさる。
 やと叱しつ。富作とみさくに向つ。いんやう。今我属いまわれぞと下したみ數万すうまんの兵へいあり。是
 よう直ただふ三木さんぎへ押寄おしよ。別所べつじよ家けと討うち。播磨はりまと畧りやくせんと欲ほす。然
 へあまども軍金ぐんぎん足たりらず。及ま兵糧へいりやうの儲たくわあり。聞きバ和主わぬしへ米穀まいこくされ。貴
 金きんまれ最多さいたく。時ときへく。と。嗚なふ。閃ひらり。と。要時えいじ某たれ借かべき所ところ存
 へありやあ。や。返答へんたふ否いなやと鞠まりまへ富作とみさく答こたて中なやう。と。有測あき
 頭領かみりやうの旨命しよめい。拿とり足たりらざる。這こ富作とみさくと人の數かず。思おもひ多くてや。恠あ即
 用もち不任ふにんせらる。世よ不有測ふあきまわぐ。吾洲わがしう原求げんもと金銀きんぎんの時ときとて。ハ。イ
 ち侍さむらいら余あ疑うひる。家内いへうちと限かぎあり。さ。て。真偽まごと知しり。又
 米穀まいこくへハ。所ところの土庫つちくら。時ときへくれども。過半かはんハ。近村ちかむらの百姓ひやくしやう。預あ置お

一所あまき借まひらする度ありとされども奥ある二所の
 土庫へ吾済が所持の米穀あまき是のく献じやべし。吾はひ
 らふ赦し下さるべしとて行龍とてと馳走大胆あり富作
 匹夫。汝が住宅の躰と見らふ母屋の結構登之の建物皆是過分
 の聖あり。憊る構圍をみ任あぐり。金銀あまき。利あり。汝が
 心の各番あまき。一名の妹七草す。兎や角拒て容度あまき。這首
 と以て知る時へ嚮より。汝が云々。皆是當座の詐あり。百姓の
 罵り云も。理りあり。きと呼らる声のま。終る登丹。後り
 控し。數千の土冠們。猛可ふとて。唱歌の聲と発し。前門。後門
 の差別あり。塙と壊ち垣と破て四方。八面より。乱れ入り。一番。富

作が妻母瀬と引とく。尺一。刀。切殺せ。行竜も富作も首筋取
 る。地上。引居。鎗の鎧の。楚と押へ罵り責てやや。汝今。金銀
 の有間と。這首す。首状と。一点も隠し。あへ。這鎗も。一撞あり
 と。敦圍あり。責問へ。富作へ。戦き。恐を。胆魂も。身も。附む。顔色
 土の。どく。衆の。声震ら。て。や。可。今。全備。不。言。上。す。べし。願へ
 一命と。助さ。可。近。年。貯し。金銀。三。万。余。金。土。庫。の。米。五。千。余。石。八。ヶ
 所。不。積。所。へ。皆。可。が。浦。上。殿。より。内。意。と。受。て。買。入。る。あり。然。ち
 あまき。も。金。銀。へ。過。半。入。ふ。借。遞。与。て。所持。する。所。七。千。余。金。も。過。半
 這。它。へ。衣。襪。器。用。の。東。西。の。も。今。一。々。不。献。じ。や。さん。命。を。う。り。の。助
 け。多。へ。と。涕。泣。して。七。帖。まで。行。竜。さ。ら。ふ。閉。入。む。首。言。富。作。が

首筋と握んぐ又も引起し、汝金と財も、所まで案内せよ、
 と罵り云ハ富作へ恐るゝ齋ふとも匿せ、所へ誘引行七千金の
 金銀と遣ひあけ、拿出し、恭々々々、献じ、行竜ハ鯨江ハ首言
 這金と拿収させ、不題大音ハ罵り云、汝情々地ハ蒲上ハ与し
 殿の米と買へ、四海の民と苦し、やんとせし、登罪ハ輕ゆる、大摩子
 亞べき者あり、天誅まさ、報來て滅亡這首ハ極う、覚悟とせよ
 やし、早く、只一鎗ハ突殺せ、這時數千の土寇們ハ我れと、籠
 入し、衣襟器用引出し、白ハ入し、春碎き及ハ火と、焚棄つ軒と碎
 き土庫と壞ち、見らば、内も、小廣く建並べ、大度共屋と打
 潰し、粉の、く、く、く、あ、あ、あ、あ、登皆數千の二投們ハ、一科、

唱噉の声を、と、挙、く、く、く、れハ、登、声、と、く、く、く、て、山谷ハ、徹、く、天地ハ、
 裏き、軌軸、是、が、為、ハ、碎、け、天柱ハ、折、地維ハ、飲、と、疑、き、恐、ろ、く、
 け、緯、も、あり、行竜ハ、大、ハ、い、と、く、く、く、く、大軍と引率し、南高て
 発向する、一人ハ、ま、る、もの、あり、既、や、と、雄、楚、の、里、まで、來、り、
 豫、く、這、地、の、領、主、久、米、五、郎、一、成、主、より、捕、緝、使、坂、月、魔、破、四、郎、速、
 延、ハ、八、百、許、人、の、夥、兵、と、与、て、蜜、原、邑、ある、一、大、富、家、和、力、屋、柴、六、と、云、
 者、の、家、と、最、大、切、ハ、守、ら、せ、う、く、久、米、殿、ハ、三、木、ハ、出、勤、と、て、臣、下、の、者、
 侶、雄、楚、と、守、ま、り、行、竜、ハ、勢、ハ、雄、楚、の、此、方、ハ、隊、と、立、く、雲、時、控、ハ、
 居、く、く、く、ハ、翼、ハ、勢、ハ、川、西、と、乱、妨、と、て、既、ハ、這、里、まで、出、て、來、ハ、是、
 より、土、寇、の、兵、と、ハ、合、し、直、ハ、雄、楚、と、責、人、と、あり、時、ハ、翼、ハ、く、く、ハ、嚮、

Handwritten notes at the top of the right page, including the name '三浦義経' (Mitsurū Yoshitaka).

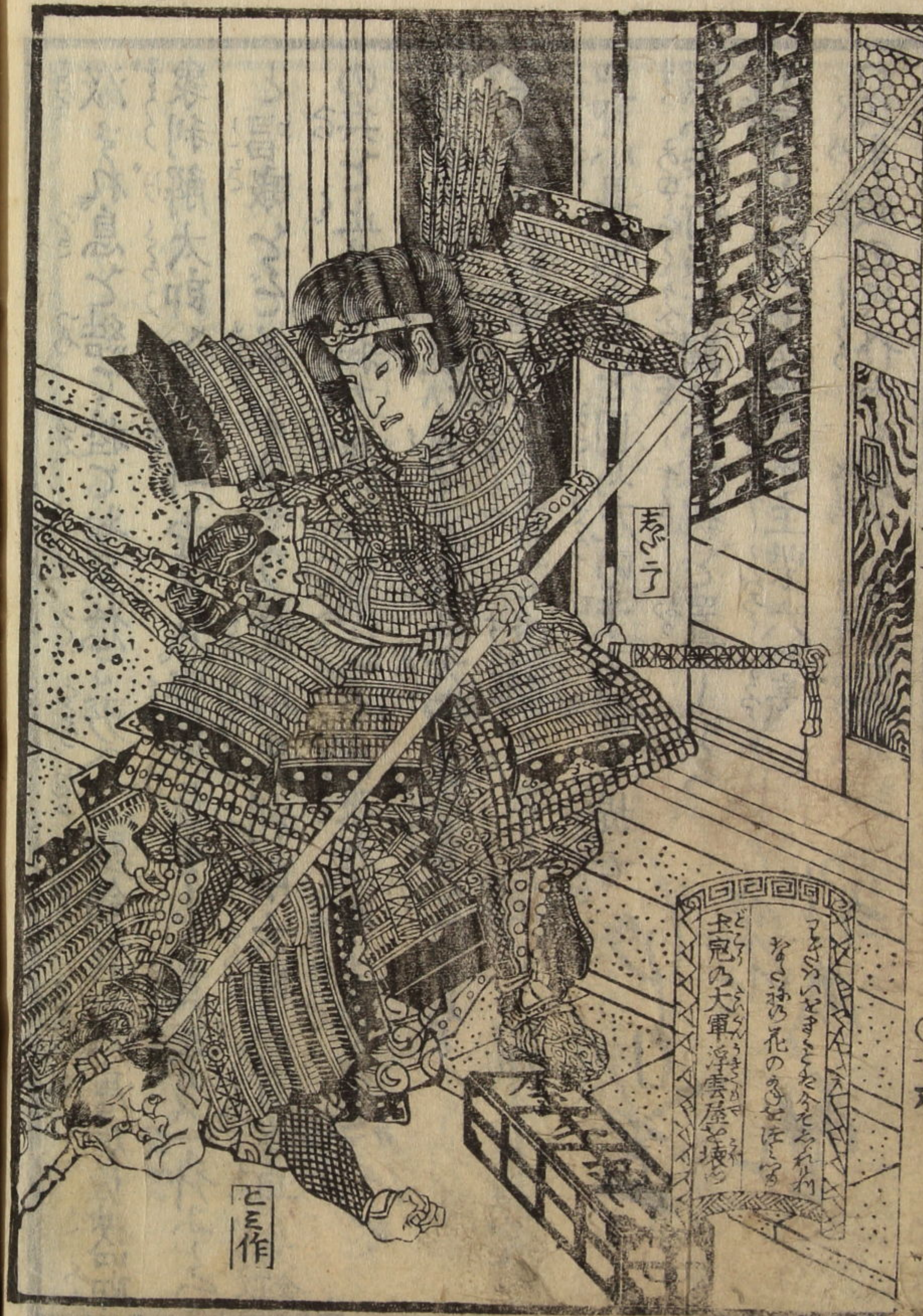
三浦義経の討兵們と一挙に責破り追ふられしむかきひて大軍
みへ向ひ來らんへ必せしむ。這里辺と責るふ時失く。大軍再び出來を
味方の難義ふ及ぶべし是より銘々手分と定め四方に分きて發
向せん。這義やゆつと鞠まば行龍頻ふ點頭て某ひが心り是ふ同
とて即時に手配と定めしむ。一手に餘江濡九郎と大将とて吳
古約高内貪著仙太是が副とて。一手に宇薙と大将とて小貞
瀬語四郎河足厚太是が副とて。一手に巽と大将とて唐加佐披
郎家利解太郎是が副とて。一手に行竜と大将とて平附本膳坪
蟻平内是が副とて。然して餘江の雄壁に向ひ巽女に蜜原邑に向ひ
大村峠と越て直ふ三木と責人とあり。宇薙の川筋と南へ出寺

家如古川と打すれて姫路の小寺家と責人とあり。行竜は蜜原村
はてへ巽と一歩に進む。開より石壁の西へ出。喬樹と打破つて直
ふ三木の西子より本城と襲人と這里より手配定めしむ。四
方に分れしむ。去程に餘江濡九郎は五千許人の土寇と
率し。直ふ雄壁の墮下し押奇せ勢ひふ乘て責しむ。這里
ふのしむ。止りしむ。久米の殿の臣下。餘江が兵推奇とひしむ。
箭と射し。命めしむ。戦ひなれば餘江心の慕しむ。急ふ責後夏
あしむ。雲時味方の責口と止め息と續て控しむ。這首ふ蜜原村
の一大富家。和力屋木六といふ者の豫て土寇の大軍。這地へ責來ん
夏しむ。けしむ。金銀太切の東西へ遺しむ。遠境の一族方へ

三浦義経の討兵們と一挙に責破り追ふられしむかきひて大軍

預け置其身も他へ匿れんと思ひし所へ雄壁より援兵不來し。坂月魔破四郎大いに制してやうらうらへ憶病之柴六土冠們何十萬少く向ふらうらも元是鳥合の集り勢へ一回大殺一陣せば風は雲と拂ふごとく散乱せんと必定し。這坂月魔破四郎が這所にて喰止る。賊の大軍一人も動ととのし響つて某乙賊の頭領巽といふ女捕禽んと向ひし賊人早くも某乙が向ふと聽威勢ふ恐ましく逃去らう。某乙常は這とと最口惜く思ひ今日まで這里ら来らば忽地ふ生捕て這回第一の功と立人這魔破四郎があらう。へ間の少くも恐らくと勿れとあゝまで大言と吐ちらう。床机ふひらりと腰打け扇とつらつ居らう。されば柴六も坂月があらう。

激され息と結て控てあり。恠る所へ女頭領巽女へ唐加佐俠四郎象利解太郎と先鋒あすく。蜜原邑まぐ責來り。一奔ふとと唱噉とぞ拳らうらう。登時象利解太郎の首言早先鋒の兵と止め自和力屋の門前近く出來り亭主出と罵りは。這家の躰と窺ひ見る。表ふ大ある陣幕とらうらう。打まら。幕の蔭に鎗長刀弓箭と透間もあ。竝らう。時坂月魔破四郎小具足ふ身と固め龍の手ふ鍵と提右の手ふ扇とつらて。大股ふ歩行出。玄関口ふ床机と置し。どらうと腰と打け。解太郎ふ向つらう。やう。當家主柴六の毫の要用ありて他行せら。某乙へ久米殿の御内。坂月魔破四郎連延と喚做者あり。歌ふ聽は。



達へ近郡の愚民と迷へ猥ふ暴挙して國中と騒よは是れ
ある行ど某し君命と奉て這里と守る速ふ這里より退ふ
よし猶吾這辭と用ひむと強て緯と行とんとせぬ禍忽地は達
ふ及びて手足錯所と異とて返答しつやと責問は象利解太郎
阿々と笑ひ大胆あり魔破四郎とあはれ汝捕孔明が計と知悉
のどき要害ふよと防ぐともいひつゝ吾大軍と支得人や我
今一臂と動さば汝們微塵ふありぬべし者侶來まといささふ
勇ま真先うけく責立まへ魔破四郎大に怒り鎖あつ取て立
むつひ解太郎めげけ突蒐まへ解太郎も憤り刀とささへ
向ひ合し十人合さるる戦ふ所へ唐加佐挾四郎土寇と引率責來

り和力屋とあつ拿圍む四門より乱れ入土庫と打潰し乱妨狼
藉大くあはれねば主の柴六勝き恐ま妻子と引つて幸ふして
裡門より逃出山林ふりけ入る辛き命と助りる坂月魔破
四郎速延へ象利解太郎と戦ひつゝ大勢家内へ籠入る金銀成
掠り器用と碎き壁と壊ち棚と飛し戸障子と踏碎き屋根の
上ふ飛上り瓦と穿と倒れ其声天地ふ震きて胆も碎魂ひも
散る恐ろしかりし夏あつたれば魔破四郎大に恐ま表の方へ逃出
ると這時表は控居しつゝ女頭領異女の鎧あつ拿て只一突ふ魔破
四郎と突伏しつゝ勇氣突然として百軍ふ秀女あがらむも頭の大
頭領とて見へつゝ登時異は土寇と激し毫とも疑議する

氣色もあぢ、大手の舟より籠入る。築山陰あぢ床机あぢりん
 上冠と下知して居る。急小解太郎と召出し、小声あぢりて
 中へん吾濟嚮より外あ立る。大村峠の体と見入。山上小殺氣陰々ど
 透間もあぢ起り。たつる。那峠あぢ三木方より。の隧へあぢ急
 小這里より進んと其味方の勝利難うるべし。登故いんといふあれ
 へ大村峠へ三木より。北郡への咽喉やして山高うして道險し。敵の兵
 今要害あぢ陣と拿すれば進んが戦ふ小登利少し。思ふ小要時
 這所小陣と居る。行竜主の西より責入るふと待り。扱んが責入るへ
 容易く三木と責取べし。汝是より只一騎大村峠小駈向ひ。那里の
 体と見届歸まよ。猶此上小機ふのぞも。変小應する手配あぢ。心得

する軟と命あぢれば解太郎へ畏うて直小大村峠の麓まで窺ひ
 寄て。這里の様在と見渡す。実異女が積小差む果して一軍山小
 儕儉阻みよ。陣と取兵の多必へ知らされとも道儉して進ふ
 難かる体あぢれば。盛小引えし。夏恁々あぢ角々。那里
 の様在と譚り。されが異頻小點頭て。さぞあぢんとして土冠の兵
 と且く止柴六が家と本陣の中として日の暮まで待り。るる

近世 新話 雲晴間雙文玉傳第三輯卷之三

大村峠
 小殺氣

